



## SAP2027年問題に備える現実解

SAP S/4HANA移行を成功に導く新たな選択肢

# オフロード アプローチ

# 1

…はじめに

## SAP2027年問題と企業が直面する現実

いま、多くの企業が「2027年」を一つの節目として意識しています。

SAP ERP 6.0 の標準保守が終了することで、SAP S/4HANAへの移行が避けられなくなるからです。

しかし、実際にプロジェクトを動かそうとすると、

✓ どこから手をつけるべきか

✓ 現行の複雑な仕組みをどう扱うか

✓ 移行リスクをどう抑えるか

といった悩みが山のように出てきます。

特に日本企業では、長年の業務に合わせてERPを作り込んできた歴史があり、“現在稼働中のSAPがその企業の独自性そのものである”ことも珍しくありません。

そのため…

✗ 過去に実装した  
アドオンの仕様が把握しきれない

✗ 外部システムとの連携が  
複雑で整理しきれない

✗ ERP本体が  
「ブラックボックス化」している

といった理由で、移行のハードルが想像以上に高くなりがちです。

本e-bookでは、こうした課題に向き合う企業に向けて、

“既存の基幹刷新だけではない” 持続可能な  
業務刷新を実現する「オフロードアプローチ」  
を紹介していきます。

SAP S/4HANA移行を単なる“作業”で終わら  
せず、未来につながるアーキテクチャー構築 へと  
変えていく視点をお伝えします。



### SAP2027年問題に向けて

業務に合わせて  
作り込んできた現在のSAP



未来につながるアーキテクチャー構築

持続可能な業務刷新を実現する  
「**オフロードアプローチ**」



# 2 SAP S/4HANA移行における3つのアプローチ

企業がSAP S/4HANAを検討する際、最初にぶつかるのが「移行方式の選び方」です。代表的な方式は以下の3つです。

移行方式	概要	メリット	デメリット
Greenfield (新規導入)	SAP環境をゼロから構築し 直すアプローチ	<ul style="list-style-type: none"><li>●標準プロセスに合わせたシンプルな構造を実現できる</li><li>●過去の負債をリセットしやすい</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>●現行業務が大幅に変わる可能性がある</li><li>●プロジェクト規模が大きくなりがち</li><li>●ユーザーの業務慣れという観点でも負荷が大きい</li></ul>
Brownfield (コンバージョン)	既存のSAP環境を活かしながら SAP S/4HANAへ変換するアプローチ	<ul style="list-style-type: none"><li>●現行資産を最大限活用できる</li><li>●比較的移行工数を抑えられる</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>●過去に作り込んだカスタマイズがそのまま残る</li><li>●技術的負債も引き継いでしまう</li><li>●「Clean Core」と相性が悪い</li></ul>
Bluefield (選択的データ移行)	GreenfieldとBrownfieldの 中間のような考え方で、 必要なデータや機能を 選りながら移行していくアプローチ	<ul style="list-style-type: none"><li>●柔軟で、リスクも比較的少ない</li><li>●不要な要素を整理しながら移行できる</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>●どこまで“負債を切り離す”か、設計次第で大きく変わる</li><li>●方式が複雑で、企画段階に時間がかかる</li></ul>

「きれいに作り直す」理想的な方法に見えますが、現実には“現場が今の業務を大切にしている”という理由で断念されるケースも多い方式です。

日本企業で最も採用されやすい方式ですが、「今抱えている課題をそのまま未来にも引き継ぐ」危険性もあります。

「ちょうど良い」方式のように見えますが、現場での納得感や整理すべきものの量によって難易度が増す方式でもあります。

## ● 「Clean Core」実現の難しさ

近年SAP社が提唱している「Clean Core戦略」は、ERPのコア部分はできるだけ標準に寄せ、拡張は外部に逃がすという考え方です。

逃がした機能はERPとは別のSAP社が提供するBTP(Business Technology Platform)というPaaS型のシステム基盤上でSide-by-Side開発により実現することになります。

このBTPは自由度が高い基盤ではありますが、市

場のエンジニアリソースやスキル、コスト面といった点で、SAPへのアドオンによるIn-App開発に比べ難易度が上がります。

実際に多くの企業がGreenfield移行(ゼロベース再構築)の理想を一度は描きますが、実際には全体のコスト、業務影響、社内の受容性などを考えると実現が難しいケースがほとんどです。

その一方、従来のBrownfield(コンバージョン中

心)では、過去のカスタマイズやデータ負債がそのまま持ち込まれ、結局Clean Coreにはほど遠くなってしまいます。また、両者のいいとこ取りに見えるBluefieldも「設計とデータ選定の難易度が高い」という問題は残ります。

そこでセゾンテクノロジーが提案するのが、次章でご紹介する新たなアプローチです。

# 3

## “新たな選択肢” オフロードとは何か？ ——「ERPを軽くする」現代のモダナイゼーション

セゾンテクノロジーが提唱する「オフロード」アプローチとは、ERP本体に積み上げたアドオンや日本固有の周辺機能を極力コア機能から排除しSaaS群とiPaaSに役割を分散して疎結合でつなぐアーキテクチャー思想です。もっと具体的にいえば、オフロードは次の2点に集約されます。

### 1 ERPへのアドオン依存を減らし、 将来のバージョンアップを容易にする

SAP S/4HANA時代はクラウド利用を前提とする企業が増え、バージョンアップ頻度も高まります。にもかかわらずアドオンが多いと、そのたびに検証と改修が必要になり、運用コストが跳ね上がります。

### アドオンは “少なくすればするほど価値が出る”時代。

オフロードは、SAP内部に閉じていた業務ロジック・データ変換・入出力などを適切に外へ切り出すことで、基幹システムを軽量化します。

この時、SAPのアドオンや業務ロジックを無理やり外出しにするのではなく、業務SaaSが持つべき機能を中心に分担配置をしていきます。

基本的に業務SaaS毎に主幹の業務部門が分かれるため、検討すべきスコープも部門毎に分解しやすく、検討スコープが広がりすぎないというメリットもあります。

### 2 日本固有の業務は 国産[SaaS+iPaaS]に“任せる”

日本企業では、

- 取引慣行
- 帳票文化
- 商習慣に基づく独自処理

が複雑で、ERP標準に載せきれずアドオンを作りがちです。しかし近年は、日本企業向けSaaSが急速に高度化しており、ERPに無理に載せるよりも、SaaS側に任せた方が早い・安い・柔軟という領域が増えています。

オフロードは、ERPにこれまで載せてきた拡張やアドオン、周辺機能を、外部のSaaSやiPaaSに移し替えていく考え方です。

本来、ERPはパッケージの標準に業務を合わせる事でのそのポテンシャルを発揮するシステムです。

しかし「業務の都合」や「集約型のシステム」によりERPへの拡張やアドオンによりシステムの一体化を進めた結果、簡単な機能改修やバージョンアップにも時間がかかり、近年のビジネス変化速度に追いつかないというケースが多いのです。

オフロードアプローチでは、以下を狙います。

- ERPコアは標準に寄せる
  - 拡張やカスタム処理は外部に逃がす
  - システム全体を疎結合にし、柔軟性を高める
- つまり「負債の持ち越しを解消しつつ短期間で移行する事でClean Coreに近づけていく」という、現実的でバランスの良い方法といえます。

### オフロードアプローチがもたらすメリット

オフロードの最大の魅力は、“未来への柔軟性”と“負債の整理”を同時に実現できる点です。

たとえば…

- ✓ ERP本体のアップグレードが軽くなる
- ✓ コア部分を標準化しやすくなる  
(= Clean Coreの実現)
- ✓ 外部システムの入替えが容易になる
- ✓ SaaSの追加がスムーズになる
- ✓ データ連携の見える化と統制が強化される

特に、これからSaaS活用が増える企業にとっては、アーキテクチャーを柔軟にしておくことが非常に重要です。

# 4

## SAP移行の成否を左右する「データ連携」 データ品質を“移行準備の核心”に据える

実際の移行プロジェクトで最も時間がかかるのは、「データ連携」まわりです。

具体的には：

- 外部システムとの接続方式
- データの変換ルール
- エラー時の運用フロー
- 移行前後での整合性確認
- インターフェースの再設計

など、細部にわたる検討が必要になります。

ERP本体だけを移行しても、外部との連携が複雑なままでは、結果的に運用負荷が下がらず「やっぱり大変だ…」という状態になりがちです。

だからこそ、オフロードアプローチでは“連携基盤の整備”を移行計画の中心に据えることが重要になります。



SAP S/4HANAでは、従来のECCからデータモデルが大きく変更されています。代表的な例として、「得意先・仕入先の統合（BP化）」や「会計データ構造のシンプル化」が挙げられます。これらは業務効率化の観点では大きな進化ですが、同時に移行データに対して厳格な整合性を求める構造でもあります。

つまり、ECCで使っていたデータをそのまま載せ替えることはできません。

特に品目・得意先・仕入先といったマスターでは、統合コード（BP化）や分類構造が変わるため、まずはデータの正確性・一貫性・重複排除といった品質改善を行い、新モデルに適合する形へデータを変換の前に“整える”工程が不可欠です。

ここで重要なのは、「ツールによる自動変換」だけでは品質は担保できないという点です。

必要なのは、どのような基準で整理するかという設計思想と、現場業務の知見を反映した判断です。

データ品質を高めることは、単なる移行対応ではなく、今後のDXにも直結します。データが整えば分析・自動化・AI活用の基盤にもなるのです。だからこそ、移行の第一歩は「データ整理」から始めることが重要です。

# 4 SAP移行の成否を左右する「データ連携」 データ品質を“移行準備の核心”に据える

当社では、データ連携中心に整理するメソッドやシステム運用ができる形に実装するためのツールやテンプレートを提供し、システム移行の“前工程”を効率化します。

以下の3ステップで、現行資産の「どこを残し、どこを変えるか」を明確にします。

STEP  
01

## 現状調査

可視化と特定による棚卸

データ連携鳥瞰図・論理構成図・データ連携のIF一覧により現行データを可視化して「何が・どれだけ・どのように使われているか」を把握します。そのうえで、段階的に重複・未使用データ・不整合を特定できるようにします。

STEP  
02

## アーキテクチャーデザイン

方針の明確化

どのデータ連携を残すか、再構築するかの方針を定めます。ここでは、SAP及び各業務SaaSの特徴と合わせて、データ連携方式・マスターデータ方針・データ活用方針・切替リスクなどを考慮しながら移行計画を策定する事によって外部化(オフロード)のタグ付けを行います。

STEP  
03

## 標準化策定

SAP S/4HANA への適応

SAP S/4HANA側のコード体系やテーブル構造と外部連携する業務SaaS側のコード体系やAPI構造に合わせたデータ変換を実装するためのデータ連携方針書を策定します。このタイミングでオフロード対象となったデータやプロセスをパターン化することで標準化方針を合わせて行います。



当社では、このメソッドでデータ連携のための整理を支援するコンサルティングサービスを行っております。

そして、整理された情報を元にツールや変換テンプレート活用した実装まで提供し、システム移行の“前工程”を効率化します。

このプロセスを体系化すれば、SAP S/4HANA移行後の業務最適化にも直結します。

# 5

## オフロードを支える iPaaS「HULFT Square（ハルフトスクエア）」 が実現するデータ連携の最適解

オフロード構想を実現するための要となるのがiPaaS（Integration Platform as a Service）です。SAP S/4HANAへの移行を成功に導くためには、「アプリケーション移行」だけでなく、「データ連携の再設計」が欠かせません。

特にClean Core戦略が重視される今、ERPコアの“身軽さ”を保ちつつ、いかに業務要件に柔軟に対応できるかが大きな分岐点になります。

セゾンテクノロジーのiPaaS「HULFT Square」は

- ✓ ERPと外部サービスの連携を統合・見える化
- ✓ データの接続・変換を一元管理
- ✓ 変更にも柔軟に対応できる疎結合構造を実現

といった特徴をもち、オフロードアプローチの中心的な役割を担います。

たとえば、将来SaaSを追加したい場合でも、ERP側の大幅改修は必要ありません。連携をHULFT Square側で吸収できるため、変化に強い構造を保つことができます。

ここでは、その中心的な役割を担う iPaaS「HULFT Square」 が、どのように移行計画とClean Coreを支えていくのかを解説します。

### ● Clean Core を維持するための データ連携の原則

Clean Core戦略の基本は、「ERPコアは標準に近い形で維持し、変更は可能な限り外部に逃がす」という考え方です。

ここで重要になるのが、「データ連携をどう設計するか」という点です。

従来、多くの企業では以下のような理由からERP内部に強く結びついた形で連携が作られてきました。

- 外部システムにSaaSが少なくオンプレのため、ファイル連携中心だった
- ファイルの取込処理を各システム側で個別に作る必要があった
- 業務ロジックがアドオン中心のため、外部連携データにもアドオン項目が影響した
- SAPベンダーに依頼して連携項目もアドオンとして実装した方が早かった

しかし、このアプローチは長期的に次のような問題を生みます。

- ✗ ERPのアップグレードが阻害される
- ✗ 技術的負債が蓄積する
- ✗ プロセス改善のスピードが落ちる
- ✗ 外部システム入れ替え時の影響範囲が大きい

Clean Core戦略は、こうした過去の構造を見直し、近年の多彩な業務SaaSが台頭している状況を踏まえて、標準APIを使った疎結合な連携を推奨しています。

“必要なデータは標準的な出口から出し入れし、それ以外は外部の仕組みに任せる”というシンプルな設計への転換です。

この流れの中で、

**「ERP外側でのデータ制御」**

**「接続方式の標準化」**

**「再利用性の高い連携の仕立て」**

が重要性を増してきています。

# 5

## オフロードを支える iPaaS「HULFT Square（ハルフトスクエア）」 が実現するデータ連携の最適解

### ● iPaaS「HULFT Square」の役割：疎結合の中核

センゾテクノロジーの HULFT Squareは、ERPと複数SaaSの“つなぎ役”として機能し、疎結合アーキテクチャの中核を担います。HULFT Square を利用することで、

- ERPコアへの過剰なアドオン実装を避けられる
- 連携の入口・出口(入出力処理)を一元的に集約できる
- 外部サービスの追加・変更が強くなる
- データ連携の統制、監視、可視化がまとめて実現できる

といったメリットが生まれます。

特に、複数部門・複数SaaSが関わる企業システムにおいては、「ERPを中心に連携を全部抱え込まない」という設計思想が極めて重要になります。ERPはコアの安定性と標準化を維持し、業務ごとの細かい調整や変換・制御はHULFT Squareが受け持つことで、Clean Coreと業務柔軟性を共存させることができます。

### ● オフロードを支える HULFT Square の具体的な機能

オフロードアプローチでは、「ERP本体に載せない方がよい処理」を切り出して外部に逃がすことがポイントになります。HULFT Squareは、まさにこの外部化の受け皿として機能します。

### ◆ 日本企業特有の商習慣への対応

たとえば、日本企業では以下のような“現場ならではの”業務が多く存在します。

- 月次での締め支払い/専用帳票の利用
- 多層構造の「品目コード」や「枝番」
- 稟議制度やそれに紐づく複雑な承認フロー
- 丸印・各印などの印影文化

これらを実装する際、次のような点を考慮する必要があります。

### ◆ テンプレート化された業務フロー実行

HULFT Square上では、利用頻度が高いSaaS連携の処理フローを80種類以上テンプレート化しており、インストールするだけで簡単に利用できます。そして、テンプレートを元にしてGUIにより簡単な操作で設定変更する事で様々な個別の処理フローを実装できます。

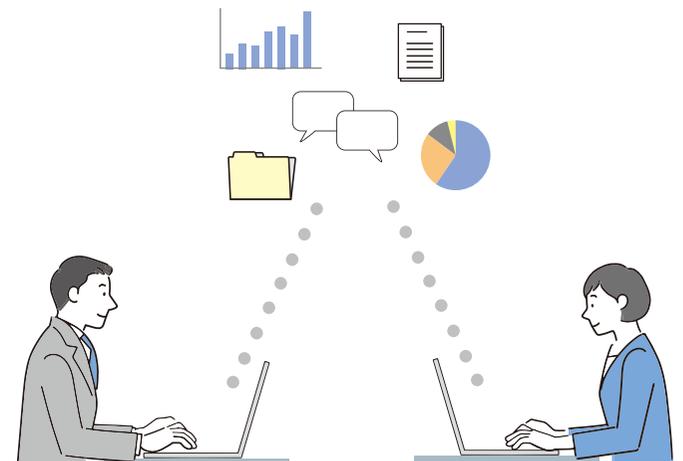
#### 例

- 受注明細のフォーマット変換・受け渡し
- マスター情報の定期同期
- SaaSとERP間のデータ受け渡しバッチ
- 仕訳データの中間処理

- 細かな入出力フォーマットの変換
- 特定取引先向けの独自レイアウト
- マスター情報の細かな整形
- バッチ連携固有の例外処理

こうした業務は、ERPコアに実装すると複雑さの原因となりがちです。HULFT Squareは、これらのローカル要件にも柔軟に対応でき、ERP外側での処理として切り出すことで負荷を分散できます。

こうした処理をERPに持ち込む必要がなくなり、SAP S/4HANA移行後においても、外部で柔軟に改変できる構造を保てます。



# 5

## オフロードを支える iPaaS「HULFT Square (ハルフトスクエア)」 が実現するデータ連携の最適解

### ● 戦略的なデータ移行を支援

移行プロジェクトの中でも、最も時間がかかりやすいのが データ移行 です。

特にSAP S/4HANAはデータモデルが刷新されているため、移行前にデータ構造や整合性の見直しが欠かせません。

HULFT Squareは、このデータ移行作業においても大きく貢献します。

### ◆ データ整理・加工の外部化

データ変換作業を、HULFT Square側で実行できます。これにより、移行作業中のERPに負荷をかけず、安定した環境で変換・加工が可能になります。

### ◆ SAP S/4HANA向けのデータ変換の効率化

- 項目マッピング
- コード変換
- 既存テーブル構造の整理
- 必須項目の補完

などの処理を、HULFT Squareの連携フローとして設定できます。

### ◆ 移行期間を短縮する役割

変換・加工の多くを外部化することで、ERP本体の移行作業に集中しやすくなり、結果としてプロジェクト全体の期間短縮につながります。

また、移行後の初期データ投入や、移行後の周辺システムとの整合性チェックなどもHULFT Square側で自動化できるため、安定稼働までのリードタイムも短縮できます。

### ● HULFT Square は “Clean Core のための連携基盤”

HULFT Squareは、Clean Coreを維持しながら業務要件に応じた柔軟な連携を実現しオフロードアプローチを無理なく実現できるというSAP移行における“最適なパートナー”です。

SAP S/4HANA移行が単なるアップグレードではなく、企業のアーキテクチャーを未来志向の形に作り替える絶好の機会と考えたとき、HULFT Squareが果たす役割は非常に大きなものになります。

### HULFT Squareの役割

#### 外部データ・ファイル



#### SAP S/4 HANA



# 6

## … SAP移行成功に向けたステップ どのように進めるべきか

オフロードアプローチを取り入れた場合の進め方は、以下のようになります。

STEP  
01

**既存アドオンと連携の棚卸しとデータの可視化による整理**  
どの機能がERPにあるべきで、どれが外部化できるのか整理する。

STEP  
02

**オフロード対象の仕分け**  
優先度をつけ、段階的に外へ移す計画を立てる。

STEP  
03

**連携アーキテクチャーの再設計**  
iPaaSを中心にした疎結合構造を描く。

STEP  
04

**SaaSとの役割分担を再定義**  
今後の業務変化も見据え、柔軟に変えられる構造を整える。

STEP  
05

**SAP S/4HANA移行と並行して外部化を進める**  
機能単位で段階的に行うことで、リスクを抑える。

「移行プロジェクト」と「システム構造の見直し」を同時に行うことで、未来に負荷を残さない移行が可能になります。



### 小さく始めて確実に進める

いきなり全社データを整理するのではなく、まずは一領域(例:品目マスター)から始めるのが現実的です。

小規模なPoCで「データ整理が業務効率にどう寄与するか」を確認できれば、社内の合意形成も容易になります。

データ整理を先行して進めることは、後続フェーズのリスクを減らし、全体の移行コストを抑えることにもつながります。

SAP S/4HANA移行は、企業規模によっては数年に及ぶ大型プロジェクトになることもあります。そのため、まずは限定領域から始める“スモールスタート”が現実的です。たとえば、品目マスターや取引先マスターなど、業務機能に比べて取り組みやすく、利用システムが多く効果が出しやすい領域を選び、PoC(概念実証)として実施します。

スモールスタートにより、データ整理の効果を可視化できるだけでなく、関係部門の理解促進や社内合意形成にも役立ちます。また、早期に成功体験を得ることで、全社展開へのモメンタムを生み出すことができます。

移行を成功させるための鍵は「小さく始めて確実に進める」こと。データ連携のための整理を前倒して着手することで、移行後の安定稼働を実現するのです。

# 7

…まとめ

## SAP2027年問題に向けた「現実的で強い移行戦略」を実現する 未来志向のアプローチ

SAP S/4HANAへの移行は、単なるシステム更新ではなく、企業のデジタル基盤そのものを再構築する大きなプロジェクトです。本書では、その成功の鍵となる **データ整理** と **Clean Core実現のためのオフロード戦略** について解説してきました。最後に、本書のポイントをあらためて整理し、次のアクションにつながる形でまとめます。

### ● データ整理が長期的な TCO 削減につながる理由

Clean Core 戦略は「余計なカスタムを減らしてすっきりさせる」という単純な話ではありません。

- ✓ アップグレードの作業量が毎年大幅に減る
- ✓ システム改修の予算が逡減していく
- ✓ 保守コストが減り、IT 部門の工数をより戦略的な領域へ振り向けられる

このように、長期的なTCO(総保有コスト)の削減につながる“経営的メリット”をもたらすのが Clean Coreの本質です。

特に、移行前にデータ連携のための整理をしておくことは、以下の面で重要な投資となります。

- ✓ データ重複・矛盾を排除し、移行作業そのものを軽量化できる
- ✓ SAP S/4HANAで要求される新しいデータ構造に適合し、移行後の追加手戻りを防げる
- ✓ データの品質向上が、以降の業務改革・分析活用の推進力になる

そして、今回紹介した「オフロード」アプローチを併用することで、従来ERPに積み上がっていた複雑な入出力処理やカスタマイズをコアから切り離し、技術的負債の肥大化を確実に防ぐようになります。



### ● Clean Core へ — 現実的で“攻め”の要素を両立した 新たなアプローチ。

それが本書で示した「データ整理」+「オフロード」  
× iPaaS「HULFT Square」による移行戦略です。

- ✓ 低コスト・低リスクで Clean Coreの状態に近づける
- ✓ 既存業務への影響も最小化
- ✓ Clean Core実現に必要な疎結合アーキテクチャーを構築できる
- ✓ アップグレードの作業/コスト/リスクも業務システム/機能単位で分散できる

特に、日本企業特有の商習慣や複雑な周辺業務を抱える企業にとって、ERPコアから切り離れた形で業務を柔軟に維持できる「オフロード」は、最も現実的かつ確実な選択肢と言えます。

## オフロードアプローチがもたらす経営的価値



### Cost Efficiency

アドオン削減による移行コストのみならず、運用コストなどの低減にもつながる。



### Future-Proofing

「バージョンロック」からの解放。コアが標準化され、アップグレードが容易に。



### Agility

SaaS単位での入れ替えが可能。ビジネス変化にすぐに対応できる柔軟性。



### DX Foundation

整理され、スムーズに連携可能となったデータがAIやデータ分析活動の基盤となる。

## Next Step >>> 無料個別相談のご案内

SAP S/4HANA移行を成功させるには、まず自社のデータ負債・カスタム資産・周辺業務の棚卸しが欠かせません。

- どのデータを残すべきか
- どの周辺業務をオフロードできるか
- どれが将来の“負債”になり得るカスタムか
- どのタイミングで移行を行うのが最適か

これらは企業ごとに状況が大きく異なるため、まずは専門家によるアセスメントを実施いただくのが最も確実です。当社では、無料公開型のLABによる個別相談(アセスメントの簡易診断)を承っています。

貴社の現状や課題に合わせ、

- データ整理の優先度
- Clean Core実現に向けたロードマップ
- オフロードの適用可能領域

などを、専門コンサルタントが分かりやすくご説明します。

SAP 2027年問題は「迫っている脅威」であると同時に、システムを未来仕様にアップデートする絶好の機会でもあります。

今こそ、一步を踏み出すタイミングです。貴社の次の一步をご一緒できれば幸いです。

お問い合わせ

[marketing@saison-technology.com](mailto:marketing@saison-technology.com)